

品もその一つで、ひととき感銘の深い、従って愛着の深いものであった。幸いなことに既訳がないようなので、時間の余裕ができた今、これを翻訳してみる気になった。翻訳を手がけるのは、実は初めてであり、精一杯やってみたが、結果は大方のご批判に待つほかはない。なお、底本には北川悌二編注 W. Somerset Maugham: *Mirage and An Official Postion* (『夢を追う男』、成美堂、昭和三十四年初版) を使用した。注を大いに参照させて頂いたことは言うまでもなく、著者に厚くお礼申し上げる。また、原作ではかなり長いパラグラフが切れ目なく続く箇所がいくつかあるが、読み易さなどを勘案して、適宜段落をつけて改行したことを、付記しておく。

平成十二年二月

大河内 康 行

うことになるだろう。モームが、遠い昔の医学生時代の同級生とハイフォンで邂逅し、彼の住家に招かれて身の上話を聞かされたというのは、おそらく実際に経験したことであろうし、その身の上話の内容も、作中で語られていることと、大筋では一致するものだろう。しかし、それを材料にして一つの短篇小説に仕立て上げる過程では、モームは、己の作家としての技量を大いに発揮して、創作に当たったに違いない。構成の巧みさ、細部の工夫、語り口のうまさなどで、読者を物語の中に引き込んでいく手際の見事さは、まぎれもなくモームのものである。

そして、とりわけモームらしさが発揮されているのは、主人公グローズリーの人物描写と、彼に注ぐ作者のアンビヴァレントな眼差しである。あつかましくて、ずるくて、見えつぱりで、根性がいやしくてと、俗悪なところを山ほどもちながら、その反面、妙にひたむきで、一生懸命で、とにかく己に忠実であろうと必死になって、これまでの人生を送ってきた男。作者のペンは、彼の波瀾に富んだ履歴を叙述にすることで、容赦のなさと同時に、ある種の優しさに満ちている。故国イギリスを食いつめて、遠く中国に移り住み、彼独特の奇妙な夢にとり憑かれて、その実現のための資金を、時に危ない橋を渡りながらも、シコシコと貯めこんでいったのだが、いよいよ実現という段になると、その目論見はことごとく、いすかの嘴と食い違い、夢は無残に潰えて、彼は再び東洋に安息の地を求めて、イギリスを去っていく。この、常道をまったく逸脱した、異常な人生を送ってきた男を、モームは、強烈な、そして愛情のこもった好奇心をもって考察し、その結果を、このように不思議な、一種の魅力ある人物として、読者に提示したわけである。私たちは、この作品を読んで、「人間とはかくの如きものでもあり得るのか」という感慨に打たれずにはいられない。そしてまた、「幸福」というものについて、改めて想いを致さずにはいられないのである。

グローズリーが最後に身を置いた境遇——モームはそれをさりげなく、しかし的確に描いているのだが——は、外目には、「はじめ」の一語に尽きる。故国を捨て、流れ流れて北ヴェトナムはハイフォンの貧民街の一隅に住みつき、娼婦上がりの現地の女と同棲し、毎日阿片を中毒といっている程に吸い、無為に、ひっそりとその日その日を送っている初老のイギリス人。貯めこんだ金のおかげで、生活には困らないとはいえ、現在の充実も、未来への希望もまるでない、常識的に見れば惨憺たる人生としか言いようのないものであろう。だが彼は、「今ほど倅せだったことは、これまでに一度もありません」と言い切っているのだ。そういう心境に、彼がどのようにして到達したかは、作品の中で納得できるように書かれていて、それがこの小説の眼目となっているわけだが、とにかく彼は今、無上の幸福に喜悅しているのである。幸福とは、結局は主観的なもの、客観的に見てどうであろうと、本人が倅せと思えばまさしく倅せなのだという平凡な真実を、私たちは、この作品を読んで、今更のように痛感させられずにはいられない。

意地悪い目で見れば、グローズリーの心の中には、自己陶醉の気配が、さらに言えば、自己欺瞞の気配すら、感じられないでもない。だが、それはそれでよいではないか。彼について、そこまでするのは酷というもの。そこまでの批判に耐えられるほど、人間というものは強くはないのだ。ボードレールも、かつてこう歌ったではないか。「常に己を酔わしめてあれ。何によるかは問わぬ。酒によって、詩によって、はたまた美德によって。そは好むがままに。とまれ、常に、常に己を酔わしめてあれ！」（『巴里の憂鬱』より）と。グローズリーが己を酔わせていたのは、思い出と幻想の「蜃気楼」であつたのだろうか。

新潟大学に勤務していた頃、私は教養課程の英語で、モームの小説や戯曲をかなり多くテキストに使用し、熟読したが、この作

思う。一つは、物語性の豊かさ、語り口のうまさであり、いま一つは、人間観察の広さと深さ、それに基づく人物描写の多彩な魅力である。

第一の点について。モームという人は、天性のストーリー・テラーであった。彼は面白い話を面白く語るといふことに、並はずれた才能をもっていたようであり、読者はその巧みな語り口と、平明暢達な文章にのせられて、彼の作品世界に快く遊ぶという悦楽を、思うさま味わうことができるのである。彼の小説があまりに面白すぎ、難解さや晦渋さのかけらもないため、モームはしばしば「通俗作家」のレッテルを張られた。同時代の難解をもって鳴る作家たち、ジェームズ・ジョイスやヴァージニア・ウルフらの「意識の流れ派」の小説が、いわば純文学の正道を行くものと考えられる人たちからみれば、彼がそのように見做されたことも理解はできる。私はここで、両者の優劣を比較裁定する気は毛頭ない。小説というものは、多種雑多な内実を含みこんだ混合体であり、人はその中から己の好みに従って、良しと思ったものを選び採って楽しめばよいのである。その結果として、私はモームを採ったということであって、それ以上でもそれ以下でもない。

第二の点について。モームは、人間というものについて、強烈な興味をもっていたようである。彼は、自分が直接・間接に見聞した人間たちに、貪欲なまでの好奇心をもって対し、彼らを観察した。無論彼には彼なりの、人間を観る基本姿勢というものがあり、それは一言で言えば「リアリズム」ということになるだろう。モームは透徹したリアリズムの眼で——それは時に峻烈な、時に皮肉をこめた、また時には諧謔を含んだものだが——人間のさまざまな有り様を考察し、その結果を多彩で魅力ある人間像として、作品の中に具象化していった。当然彼らは、理想的な面よりは現実的な面を、賢明さ、気高さよりは愚かさ、浅ましさをより多く露呈して描かれることになるが、これらの人物たちの生彩ある描

出は、私たち読者に、人間というものの複雑さ、多様さを改めて認識させてくれ、彼らの織りなすさまざまな人間模様の容赦ない描写は、人生というものの苛烈な、美醜こもごもの真実を開示してくれるのである。

すぐれた物語性と多彩で魅力ある人物の描出、この二つは、小説が本来具備すべき基本要件である。そしてモームの小説が、この二要件を十分に満たしていることは、誰もが認めるところであろう。この意味で、彼の小説は、もっともっと読まれるべき価値を有しているはずである。モームを愛読して、小説を読む楽しさを満喫し、それに加えて、より深く広い人間理解を、またさまざまな意味での「人生の糧」を得ていく読者が、今も、将来も、絶えることなきを信じ、かつ願うものである。

訳出した作品について若干述べる。

前述したように、この短篇の初出は *The Gentleman in the Parlour* (『一等室の紳士』) と題する紀行文集の中の一章である。この作品は、副題に「ラングーンからハイフォンへの旅の記録」とあるように、モームが一九二〇年代の後半に、インドシナ半島の各地を旅行して見聞したことを素材として書かれた文章を集めたものだが、その中には、普通の旅行記とはかなり趣きの異なった文章も少なからずあって、興味深い。例えば、短篇小説風やお伽話風のものとか、戯画化された人物描写や故意に美文調で書かれた情景描写など多彩であり、モームはここで意識的にさまざまな表現様式を試みているようである。しかし、叙述方法が何であれ、一貫して変らないのが、「人間」に対する彼一流の関心の強烈さである。東南アジアという、ヨーロッパとは異質の風土に接し、異質の習俗や人情に触れて、「人間、この多様なもの」への彼の好奇心は、いやが上にも刺激されたようで、その結果として生まれたものの一つが、この『蜃気楼』である。

この作品は、「事実を素材にして書かれたフィクション」とい

## あとがき

ここに訳出したものは、イギリスの作家サマセット・モーム (Somerset Maugham, 1874—1965) 作 *Mirage* (1929) である。この作品は、*The Complete Short Stories of William Somerset Maugham, Volume Three* (Heinemann, 1952) に収められているが、もともとは、*The Gentleman in the Parlour* (1929) という旅行記の中の一章として発表されたものである。ちなみに、この短篇は、私の知る限りでは、いわゆる本邦初訳である。

今は昔、昭和二十年代の後半から三十年代にかけて、モーム・ブーム、と言ってよい一時期が、日本の読書界に現出したことがあった。彼の長編・短篇小説を初めとして、戯曲、エッセイなどが続々と翻訳・出版され、それと併行して、モームの「人と作品」について語り論じた、少なからぬ数の文章が発表され、研究書も上梓されていった。その先頭に立って力を尽くしたのは、中野好夫、朱牟田夏雄、上田勤といった、英語の、文学の、そして人生の、いわば「達人」と言うべき方々であった。そして、当時大学生だった私は、教室でこれらの先生方の警咳に親しく接しているうちに、自然にモームに興味をもち、彼の小説を読み出したらやめられなくなり、片っ端から読み耽っていった。とりわけ愛読したのは『人間の絆』であり、主人公が到達した「ペルシア絨毯の哲学」を知った時は、迷妄の闇に一条の光明のさし込むのを見る思いであった。

やがて、星霜移り人は去り、前記の方々はみな、既にかなり以前に彼岸の人となられ、私もまた老いた。そして、昭和四十年代の初め、大学紛争が盛んになる頃から、モーム・ブームは急速に下火となり、以後は彼の小説が一定数の読者によって細々と読み

つがれ、彼の劇がときたま上演されるのみとなった。大学の教養課程用の英語テキストとして、かなりの数のモーム作品が出版されていて、それがよく使われたことが、モームの読者数を下支えする、結構大きな要因となっていたようだが、昭和六十年代から猛然と勢力を得てきた、「実用英語至上主義」、「文学テキスト断固排除」の大波に呑みこまれて、それもあえなく潰えた。今では、四十才以下の人で、モームの愛読者を探すことは、かなり難しからう。

何故にそうなってしまったかを、ここでくどくど論じるつもりはないが、大ざっぱに言えば、久しい以前から続いている、一般人の「読書離れ」、とりわけ若い人たちの「文学離れ」が、その大きな原因の一つだろうし、さらに言えば、実利性、効率性、便利性を常に優先させ、「形」があって明確な「結果」の出るものばかりを追い求める、当今の風潮から必然的に生じた、現代日本の文化的衰弱・頹廃情況とも結びつくものであろう。多くの人々は、「実利」をもたらさぬ、「形」の裏づけのない悦び——人の心に感動や豊かさを与え、精神の高揚や魂の浄化をもたらしてくれる「文学」などというものは、「縁なき衆生」となり、それで少しも心に痛痒を感じなくなっているのである。

だが、世の中の関節がどうはずれようと、それを矯め直すのは、もとより私の任ではないし、有り体に言えば、私にとってそれはどうでもいいことだ。私は「私自身」であり得るなら、それでよい。私は私の好悪の感情に忠実でありたいし、それを当世の風潮に邪魔されるのは真平御免である。好きなものは好き、嫌いなものは嫌いと言い切って、頑として譲らない、それが老人の特権だと私は信じている（他人様には、さぞご迷惑なことでしょう）。

つい、あらぬ方にベンが走った。自制心のなさを恥じ、かつお詫びして、話をモームに戻そう。

私がモームの文学に惹かれる理由は、大別して二つあるように

の子は、どんな子だったかな、なんてことも考えますよ。きっとかわいい子だったでしょうね。せめてひとりぐらいは、愛人にして囲えばよかったのにと、悔やまれてなりません。素晴らしい国ですよ、中国は。あの色彩豊かな店、そこには老人がいて、膝を曲げてすわって水煙管をふかしていたり、派手な看板がかかっていたり、そして壮大な寺院が建ち並んでいた。いやまったく、あそこそが人間の住むに価値ある所です。あそこでは、人間が生きてますからね」

蜃気楼が彼の目の前で輝いていた。幻が彼を捉えて離さなかった。彼は倅せだった。それにしても、この男の行く末は、一体どうなるのだろうか、とわたしは心に思った。ま、しかし、それはまだ先のこと。この世に生をうけて以来、おそらくは初めて、彼は「現在」をその手にしかと握りしめていたのだ。

— 完 —

り口まで来たまきにそのとき、彼の勇気が挫けてしまったのだ。イギリスは彼をひどく失望させた。だから今ここで、中国をも試してみるのが、こわくなったのだ。もし中国にも失望させられたら、彼にはもう何もなくなってしまう。長い年月、イギリスは砂漠に浮かぶ蜃気楼のようなものであった。しかし、彼がその惹きつける力に屈してしまったとき、あのキラキラと光る泉も、椰子の木も、青々としげる草むらも、実は、果てしなくうねうねと続く砂丘以外の何ものでもなかった。彼には今、中国があった。そして、中国を再び見ることがない限りは、永久に中国を自分のものとしておくことができたのだ。

「どういうわけでしょうね、わたしはそのまま居ついてしまったんです。いやまったく、月日のたつのが早いのは、驚いてしまいますよ。わたしは、したいと思うことの半分もやれる時間がないみたいです。とにかく、わたしはここで快適に暮らしています。あの婆さんは、阿片を吸うときのパイプの下拵えをとてもし上手にやってくれますし、女房はともかわいいうつですし、それに、やんちゃ坊主の息子もおりますしね。人間、ある所に住んで倅せでいられるのなら、ほかの土地に移る意味なんて、何もないじゃありませんか？」

「で、あなたは今、ここに住んで、倅せですか？」わたしは訊ねた。

わたしは、その大きな、ガランとした、うす汚れた部屋を見まわした。そこには心に安らぎを与えてくれるようなものは何もなく、家庭的感情をかし出してくれるような、個人的な思い入れのこもった小物とても、何ひとつなかった。グロースリーは、このいかかわしい小さなアパート、男女密会の場合として、またヨーロッパの人間が阿片を吸う場所として利用されているこのアパートを、そこを保有する老婆もろとも、そっくり借り受けた。そして彼は、今なお、そこに住んでいるというよりはむ

しろ、いわばキャンプをしていたのだ。まるで翌日にでも、荷物をまとめてそこをひき払うつもり、といった感じで。

ちよつと間を置いてから、彼はわたしの質問に答えた。

「わたしは、今ほど倅せだったことは、これまでに一度もありません。そりゃあ、上海へはいつか行くだろうと考えることは、ときどきあります。しかし、たぶん行かないでしょうね。そして当然のことですが、イギリスはもう二度と見たくありません」

「時にはさびしいとは思いいきませんか？ 話し相手もないようですし」

「いや。ときどき中国の不定期貨物船が、イギリス人の船長やスコットランド人の航海技師をのせて入港します。そういうときには、船内に入れてもらって、昔のことを話題に、彼らと語り合うんです。また、当地には、もと税関に勤めていたフランス人の老人がおりまして、英語が喋れるもんですから、ときどき彼に会いに行ったりもします。しかし本当を言いますと、わたしはあまり人と会いたくないんです。わたしは想いにふけることが多く、わたしとわたしの想いとの間には他人がわりこんでくると、どうも神経にさわりましてね。わたしはひどい阿片常用者ではありませんよ。朝は胃袋を落ち着かせるために、一、二服は吸いますが、あとは夜になるまで吸いません。そして夜になると、いろんなことを思い出すんです」

「どんなことを思い出すのですか？」

「ありとあらゆることをです。ときにはロンドンのこと、わたしの若いころのロンドンはどうだったか、なんてこともね。しかし、たいていは中国のことです。あそこで過ごした楽しかった日々のこととか、金を稼いだやり口のこととか。それに知り合いだった連中のこと、そして中国人のことも思い出しますよ。ときどきは危ない目にもあいましたが、いつも何とかうまく切り抜けてきました。そして、わたしがその気になればものにできたはずの女

んだ、と確信した。ヨーロッパはもうおしまいだ。東洋こそは、住むに価値ある唯一の場所だ！

彼はジブチで、またコロombo、シンガポールでも一時上陸した。だが、サイゴンでは、船が二日間停泊したにもかかわらず、船中にとどまっていた。ずっと大酒を飲み続けてきたので、熱帯の気候の下で、ちょっと体がまいっていたのだ。しかし、船がハイフォンに着き、そこで四十八時間停泊の予定と聞かされて、町をちよつと見物してみるのもわるくないな、と思った。そこは中国に到着する前の最後の停泊地だった。彼は行先を上海と定めていたのだ。上海についたら、とりあえずホテルに宿をとり、町をちよつと見てまわって、それから住む所と、それに女の子をひとり確保するつもりだった。そうだ、小馬を一、二頭手に入れて、競馬に出場させてみよう。友達もすぐにできるだろう。東洋の連中は、ロンドンのやつらみたいなのに、固苦しくも、取り澄ましてもないからな……。

ハイフォンで上陸した彼は、ホテルで食事をとり、そのあと人力車に乗り込んで、車夫の少年に、女が欲しいんだが、と告げた。少年は彼を、あるみすばらしい住居へとつれていった。そこが、あの晩わたしが何時間も過ごしたあの家だったのだ。そこには、あの老婆と、今は彼の息子の母親であるあの娘とがいた。しばらくすると老婆が、一服「おやりになりませんか、すすめてきた。彼はそれまで一度も阿片を吸ったことがなかった。あれは恐ろしいものだ、ずっと思ってきたのだ。だが、今はもう、一度試してみるのもいいだろう、という気になった。その晩、彼は体調が至極よかったし、その娘はとても抱き心地のいい、かわいい子だった。彼女は中国の娘のような感じで、小柄で器量よしで、まるで人形みたいだった。とにかく、彼は阿片を一、二服吸い、とても心楽しく、満ちた気分になった。彼は朝までずつとその家にいた。眠らなかった。とても安らかな心地で、ベッドに横たわり、

ものの想いにふけていた。

「わたしは、船が香港に向けて出航するまで、その家にとどまっていた」と彼は言った。「そして出航したあとも、そこにとどまり続けました」

「船に置いてきた荷物はどうしました？」とわたしは訊ねた。

ついこんなことを聞いてしまったが、というのも、どうもわたしという人間は、人生の理想的な側面と、現実的な細部とが、どちやうとうまく結びつくのかということに、おそらくは不必要なほどに興味をもつという癖があるらしい。小説の中で、無一文の恋人のカップルが、スマートなボデーのレーシングカーに乗って、彼方の丘を越えてドライブしていくのに出くわすと、このカップル、一体どうやって車のレンタル代を工面したのだろうか、いつも知りたくなってしまう。また、ヘンリー・ジェイムズ（「註」アメリカの小説家。一九一五年イギリスに国籍を移す。『鳩の翼』など、精緻な心理描写を特色とする作品を多作した）の小説の人物たちは、おのれの心理状況を微細に考察するその合間に、一体どうやって、肉体の生理的要求を処理したのだろうか、心中で疑問に思ったことが何度もあるのだ。

「わたしの荷物は、衣類を詰めたトランク一個だけでした。わたしは、そのとき身につけている以上のものは、あまり必要としない人間なんです。それで、その娘と一緒に、人力車に乗って、荷物を取りに行ってきましたよ。わたしは、次の船が入港するまでの間だけ、そこに滞在するつもりだったんです。つまりですね、目的地の中国にこんなに近づいたもんですから、ここでちよつと一息入れて、中国に着く前に、いろんなことに馴れておこうと思つたわけなんです。わたしの言っていること、理解していただけるでしょうか？」

わたしは理解した。今の言葉の最後のところを聞いて、彼の心が、わたしには痛いほどによくわかったのだった。中国への入

都会でこんなことになるなんて、彼は全然予期していなかったのだ。まあしかし、それが今のロンドンの悪いところなんだろう、ロンドンは大きくなりすぎた、一八九〇年代の初めごろのような、楽しい、親しみのある街ではもはやなくなった。昔のロンドンは、いわばこなごなに砕け散ってしまったのだ……。

彼は、遊び相手にする女の子を何人かつかまえたが、彼女らは、彼が昔遊んだ女の子のようにはとてもいかなかった。昔のような楽しい子たちでないばかりか、そいつらが、彼のことを「ヘンなおっさん」と思っているらしいことを、彼は漠然と意識するようになった。彼はまだ四十を少し越したばかりなのに、すっかり年寄りと見なされているようだった。バーの近くにたむろしている大勢の若者たちに、好意を見せようと近づくのだが、すげない態度を示されるばかりだった。とにかく、この若いやつらは酒の飲み方というものを知らない。おれがひとつ教えてやろう……。

彼は毎晩酔っぱらった。このいまましい町で、彼にできるのはそれだけだった。しかし、驚いたことに、その翌日彼は二日酔で起きられなかったのだ。きつと中国の氣候のせいで体力が衰えたんだ、と彼は思った。医学生だった若いころは、毎晩ウイスキーのボトルを一本空けても、翌朝は元氣潑刺としていられたものなのに……。

彼は次第に、中国でのことを想うようになった。自分でも目にとめたとは全然思っていなかったいろいろなことが、心によりがえってきた。あそこで送った生活は、そう悪いものでもなかったんだ。中国の女を寄せつけないでいたなんて、おれも馬鹿だったな。あいつらはかわいい女の子たちだった、全部が全部とは言わないが。何よりもあの子たちは、イギリスの女のように、変に氣取った態度など、決して見せなかった。おれぐらいの金をもっていれば、中国でめちゃくちゃに楽しい時が過ごせたはずだったのだ。かわいい中国女を愛人にして困ったり、社交クラブに入会し

たりすることもできただろう。そうすれば、一緒に酒を飲んだり、トランプやビリヤードをやる楽しい仲間も、大勢できたことだろう……。

彼は中国の商店街や、そこでの喧騒、荷物を運ぶ苦力たち、平底帆船が停泊している港、そして兩岸に仏塔が建ち並んでいる川などを思い出した。おかしい話だった。中国にいた間は、中国のことなどちっとも考えなかったのに、今になって——そう、彼は中国が忘れられなくなってしまった。中国が、いわば彼に取り憑いて離れなくなったのだ。ロンドンでは白人が住むにふさわしい所ではない、と彼は考えるようになった。ロンドンではもはや「墮落」してしまった。要するにそういうことなのだ。そしてある日、ある考えが、ふと彼の頭に浮かんだ。もう一度中国に戻るといっても、わるくないかもな、という考えが。

もちろん、それは馬鹿げていた。彼が二十年もの間、奴隷のように働いてきたのは、ひとえに、ロンドンで楽しい時を過ごせるようになるためだったのだ。それなのに、またぞろ中国に行つて暮らしたいなんて、よほどどうかしている。彼ぐらいの金があれば、世界中のどこでだって、楽しく暮らせるはずなのだ……。だがどういうわけか、中国以外の所は、彼の頭に全然浮かんでこなかった。そしてある日、映画を見に行ったら、上海のシーンが彼の目にとびこんできた。それできまりだった。彼はロンドンにうんざりし、ロンドンを憎んでいた。ロンドンを出て行こう、そして今度は、永久に戻るまい、と心に決めた。イギリスに帰つてきて一年半がたったが、それは東洋での二十年よりもずっと長かったように、彼には思えたのだった。

グロズリーはマルセイユから出航する東洋行きのフランス船に乗り込んだ。そしてヨーロッパの海岸が海の中に沈むのを見たとき、彼は大きく安堵の溜め息をついた。船がスエズに着いて、東洋の最初の氣配を感じたとき、おれのやったことは正しかった

に耐えてきたということには、確かにある種の感銘を与えるものがあつた。それは、執念、ともいふべきものを示していた。

「まあ仮にですよ」彼はわたしに言った。「休暇をとってイギリスに帰れたとしても、わたしは帰らなかったでしょうね。永久帰国」ができるという見きわめがつくまでは、帰りたくなかつたんです。そしていよいよそのときが来たら、ひとつ派手にやってやろうと思つたんです」

彼は夜会服を着こみ、ボタンホールにくちなしの花を一輪さして、夜毎に外出する自分の姿を心に描いた。あるいはまた、燕尾服に身を固め、茶色のシルクハットをかぶり、オペラグラスを肩にかけて、ダービー競馬に出かけていく自分の姿を心に描いた。女の子たちをひとわたり見渡して、気に入ったのをひとり選び出す自分の姿も心に浮かんだ。ロンドン到着の第一夜は、思いきり酔っぱらってやろうと、彼は心に決めていた。この二十年間、彼はついぞ酔っぱらつたことがなかつた。あの「仕事」をやつていたのでは、酔っぱらう余裕など、とてもなかつた。不測の事態に備えて、いつも油断なく警戒していなければならなかつたのだ。帰国の船の中でも、酔っぱらわれないように気を付けよう。ロンドンに着くまでは、とにかく待つんだ。ロンドン到着の夜は、どんな素晴らしい夜になることだろう！二十年間、それを思い続けて今まで来たんだ……。

グローズリーが中国税関を辞めた理由を、わたしは正確には知らない。その職場が彼にとつて居づらいものになつたためか、あるいは彼の契約期間が終つたためか、それとも、彼のためこんだ金が、目標としていた額に達したためだったのか、そのへんのことは、つまびらかでない。しかしとうとう、彼は船に乗り、帰国の途についたのだつた。彼は二等に乗つた。ロンドンに着くまでは、なるべく金を使わないでおこうと思つたのだ。

ロンドンに着くと、さつそくジャーミン通りのホテルに部屋を借りた。彼は以前からずっと、この通りに住んでみたいと思つていたので。次に洋服屋に直行し、上下ひと揃い、それもとびきり上等のやつを買い求めた。それを着こんで、彼は街をひとわたり見てまわつた。

ところが、街は彼が記憶していたのとはだいぶ様子が変わつていたので。車馬の往来が前よりもずっと激しくなつていて、彼はまごまごし、すこし不安になつた。彼はレストラン・クライテリオンへ行つてみたが、以前よくそこにたむろして酒を飲んだバーは、どこにもなかつた。ふところがあたたかかつたときによく食事した、なじみのレストランが、レスター・スクエアにあつたのだが、どうしても見つけ出すことができなかった。きつと取りこわされてしまつたのだらう、と彼は思った。パヴィリオン座の近くへ行つてみた。だが遊び相手になるような女はいなかつた。がっかりしたが、氣をとり直してエンパイア座の方へ行つてみた。ところが、昔あつた遊歩道は、整理されてなくなつていた。これには相当こたえた。彼にはどうも事情がよく呑みこめなかつた。とにかく、二十年間の変化に対しての心の準備を、しっかり整えなくちゃいかん。それに、他に何もできなくとも、せめて酔っぱらうことぐらいはできるはずだ……。しかし彼は中国で何度か熱病にかかつたことがあり、ここへきて、氣候の変化でそれがまたぶり返してしまい、体調がひどくすぐれず、四、五杯飲んだだけで、早く帰つて寝たいと思つてしまふのだつた。

最初の一日は、それに続く多くの日々の単なる見本にすぎなかつた。やることなすことのすべてがうまうまくなかつた。ひとつ、またひとつと、がつくりくるようなことが重なつていくさまを語るグローズリーの声の調子は、次第に苦味を帯びた、愚痴っぽいものになつていった。昔の場所はなくなり、人の心も變つた。友達にはなかなかできず、彼は妙に孤独だつた。ロンドンのような大

監吏としては、これはひと財産であった。彼はこの金を、まともなやり方で手に入れたのではなかった。そして、その金儲けの方法の詳細についてはあまりよく知らないけれど、彼が話の途中で突然口をつぐんだり、下卑た目つきでこっちを見たり、口を滑らしてチラとほめかしたりしたことなどから推測して、どんな汚い取引でも、やる価値ありと見きわめがつけば、彼は絶対にしりごみすることはなかっただろう、とわたしは想像した。

彼にとって、阿片の密輸入ほどおいしい話はなかっただろうし、これを安全かつ有利に行なう機会を、彼の役職が提供してくれたのだった。彼の上司たちは、何度も彼に疑惑をもっただろうが、その不正行為の証拠をつかんで、断固たる処置をとるまでには、遂に至らなかったようだ。彼らはやむをえず、グロズリーの勤務港を別の所に移すことで満足したが、そんなことでは、彼の「仕事」の妨害には少しもならなかった。彼らは懸命に彼を監視したが、彼の方が一枚も二枚も上手だった。わたしは、彼があまり多くを喋りすぎて、自分の人間的信用を失ってしまうのではないかという心配と、自分の辣腕ぶりを自慢したくてたまらないという気持との間で、揺れているのがよくわかった。

彼は、自分が中国人からどんなに信用されていたかを、誇らしげに語った。

「中国の人たちは、わたしが絶対に信用できる人間だということをよく知っていました。そしてそれが、わたしにとって、大きな力となったのです。実際、わたしは一度たりとも彼らを裏切ったことはありませんでした」

このことが、おれは誠実な人間なんだという深い自己満足感を、彼に味わわせてくれた。中国人たちは、グロズリーが骨董品に強い興味をもっていることを知って、それを利用した。彼らはしょっちゅう彼に「ちょっとした品物」を贈ったり、「掘出物」をもってきたりした。彼は、彼らがそれをどうやって入手したかなどに

ついては、一切詮索せず、黙って安い値段で買い取り、ある程度たまると、それを北京に送って売りさばき、相当な利益を得た。わたしは、彼らの金儲けの仕事の第一歩が、競売所で品物を買ってそれを質入することから始まったことを思い出して、なるほどな、と合点したのだった。

二十年という長い間、けちくさいごまかしと、みみっちい不正行為を積み重ねて、彼は少しずつ金を稼いでいき、ためこんだ金は全部上海で安全投資した。彼はできるだけつましい生活を送り、給料の半分は貯金した。一度も休暇をとらなかったが、それは無駄に金を使いたくなかったからだ。中国人の女に決して手を出さなかったのは、もつれた関係に引きずりこまれる危険を避けたかったからだ。酒も口にできなかった。彼はただひとつの欲望に身を焦がしていた。たつぷり金をため、それを資金として、いつかはイギリスに帰り、若いときに無理やり取り上げられた生活をもう一度やってみたいという大望に。それが彼の願い求めた唯一のものだったのだ。

グロズリーは、中国ではさながら夢の中にいるような心地で暮らした。自分の周囲には何の関心も払わなかった。そのきらびやかな色彩、異国情緒、快楽への誘惑、どれもこれも、彼にとっては何の意味もないものだった。彼の前には、いつもロンドンの蜃気楼が浮かんで見えていた。レストラン・クライテリオンのバー、横木に足を掛けて立っている彼自身の姿、エンパイア座やパヴィリオン座附近の遊歩道、そこで拾った娼婦、ミュージック・ホルのかなしきおかしき芝居や、ゲイエティ座でのミュージカルの舞台などなど。これこそが生活であり愛であり冒険なのだ。これこそがロマンスなのだ……。この長い年月、彼がそのような目標、つまりかくも低俗な遊興生活を再び送りたいという目標を心に抱いて、それが実現するまでは、世捨て人のような禁欲の生活

を吸っているときは、いわば忘我の境地に浸っているようだった。だがその合間の、吸っていないときは、彼は実によく喋った。わたしは何度か帰ることをほのめかしてみたのだが、全然許してもらえなかった。次第に時が過ぎていった。彼が吸っていないときに、わたしは一、二度ウトウトとした。彼は自分のことをすべて語った。どんどんと語り続けていった。わたしが口を開くのは、彼に話のきっかけを与えるときだけだった。

わたしは彼が話してくれたことを、その言葉通りに語ることはできない。彼は同じことを繰り返し喋ったり、ひどくまわりくどい話し方をしたり、自分の身の上話にしても、初めに最近のことを少し、次に昔のことを少しといった調子で、混乱して話したりしたので、こっちで整理して話の脈絡をつけないならならなかった。また、少し喋りすぎたかなと感じて、前言を取り消したこともあったし、明らかに嘘をついているとしか思われなときももあった。だからわたしは、彼が時折見せる笑顔や眼の表情から、真実を推測してみる必要があった。彼は、そのときどきの自分の感情を表現する言葉がなかなか見つからず、そういうときわたしは、彼の俗語っぽい比喻や陳腐で下品な言いまわしから、その真意を推量してみなければならなかったのである。

わたしは彼の本名が何であったかをずっと自問し続けていた。それは舌の先まで出かかっているのに、どうしても思い出すことができぬということが、わたしを苛立たせた。もっともそのことが、ほんの僅かにせよ気になるのは、一体どうしてなのか、自分にもよくわからなかったのだが。彼は、初めはわたしにいくぶん警戒心を抱いていたらしい。それでわたしは、ロンドンでの彼のあの非常識な行動や刑務所行きのが、長年彼の心をさいなんでいた秘密だったのだな、と悟った。遅かれ早かれ、自分の過去が暴かれるだろうという恐怖に、彼はこれまでずっと取り憑かれてきたようだった。

「今になっても、あなたが医学校でのわたしのことを思い出さないというのは、おかしいじゃありませんか」と彼は、鋭い眼差しでわたしを見つめながら言った。「あんたはよほど記憶力の弱いおひとですなあ」

「何をおっしゃるんですか。かれこれ三十年も前のことなんですよ。それ以来、わたしは何千人という人に会ってきているというのを考えてみて下さい。あんただって、わたしのことを確に覚えていないでしょう。それと同じで、わたしだってあんたのことを覚えていないのは当然ですよ」

「それはまあ、確かにおっしゃる通りですな」

どうやら彼は安心した様子だった。

とうとう彼は十分に阿片を吸い終えた。老婆も自分用のパイプを準備して、一服吸った。それから、子供が寝ている敷物の方へ行き、そのそばで体を丸くちぢこませるようにして、横になった。老婆はそのままピクリとも動かず、どうやらすぐ眠ってしまったらしかった。

わたしがようやくこの家を辞して外に出ると、人力車ひきの少年が、足掛け台の上で、体を丸くしてぐっすり眠っていた。わたしは彼をゆり起こして、二ピーストルを与え、自分で歩いて帰るからもういい、と彼に告げた。ここが町のどの辺かはわかっていなし、夜風に当たりながら、すこし体を動かしたかったのだ。

わたしがその晩聞かされた話というのは、何とも不思議で風変わりなものであった。

グロズリーが中国で過ごした二十年間のことを語るのを聞いていた間、わたしは恐怖にも似た感情に何度となく襲われた。確かに彼は、しこたま金をためこんだ。その額が正確にくらであつたかは知らないが、彼の話しぶりから判断すると、一万五千ポンドから二万ポンドの間であつただろうと思われる。平の乗船税関

日中、最低のひどい気分で、何度も死にそうなほど吐きました。そしてゲエゲエやりながら、わたしはみじめにこんな独り言をつぶやいたもんでした、『こういうのを素晴らしいというやつがみたい!!』」

グローズリーは背中を椅子にもたせかけて、低い声で陰気に笑った。

「それは粗悪な質のものであったんでしょ。あるいは、すこし深く吸い込みすぎたのかもしれない。連中はあなたをいいカモだと見て、一度吸ったかすの阿片をあなたにあてがつたんでしょ。そういうのを吸わされたんじゃ、誰だつてぶっ倒れてしまひますよ。もう一度試してごらんになりませんか？ 上質のものだと保障できる阿片を、ここに少しもつてくるんですがね」

「いいえ結構です。一度だけでもうたくさんです」

「じゃあ、わたしが一、二服吸つてもかまいませんか？ こうした氣候の土地では、阿片はやはり必要ですよ。赤痢の予防にもなりますしね。わたしは一日の今ごろには、たいてい少しやることにしてゐるんです」

「どうぞおやり下さい、わたしにかまわずに」とわたしは言った。

彼は奥さんにまた何か言った。すると彼女は、しわがれ声を張りあげて、誰かを呼んだ。木の衝立のうしろの部屋から答える声がして、一、二分たつと、ひとりの老婆が、小さな丸い盆をもつて現れた。彼女はしわくちやの婆さんで、入ってくると、赤くよごれた口で、わたしにニヤリとお世辞笑いをしてみせた。

グローズリーは立ちあがって、ベッドの方へ行き、そこに横になった。老婆は盆をベッドの上に置いた。盆の上には、アルコール・ランプ、パイプ、長い針、そして阿片の入っている丸い小箱がのせてあった。老婆はベッドの上にしゃがみこみ、グローズリーの妻もベッドの上にあがって、足をお尻の下に曲げこみ、背中を壁によりかかせてすわった。

グローズリーは、老婆が阿片の小粒を針の上にのせ、それを焰にかざし、ジュウジュウと音をたてるまで焼いてから、パイプに詰めるさまを、じっと見ていた。老婆はパイプを彼に渡し、彼はそれを大きくひと息吸いこんで、少しの間肺のためこんで置いて、それから厚い灰色の雲のようにして、煙を吐き出した。彼はパイプを老婆に返し、老婆はもう一服つくり始めた。誰も無言だった。彼は三服続けて吸って、それから体をぐったりさせた。

「やれやれ、だいが気分がよくなつた。ひどく疲れた気がしていたもんですから。彼女は阿片を吸うときのパイプの下拵えをする手際が、実に見事なんですよ、この鬼婆さんはね。あなた本当に一服おやりになりませんか？」

「本当に結構です」

「じゃあご随意に。代わりにお茶をおもちしましょう」

彼は奥さんに何か言うと、彼女はベッドからおりて部屋を出ていき、やがて小さな急須と中国風の茶碗を二個もつて戻ってきた。「このあたりでは阿片を吸う人が大勢いますよ。吸い過ぎなければ別に害はないんです。わたしは一日に二十服から二十五服以上は決して吸いませぬ。その程度に抑えておけば、何年続けても大丈夫です。フランス人の中には、一日に四十服から五十服も吸うのがありますが、こりゃあ多すぎます。わたしは決してそんなにはやりませぬ。まあときどき、陽気な気分になりたいときは別ですがね。わたしの場合、阿片は決して体の毒にはなつてないということ、これは断言できますよ」

わたしたちはお茶を飲んだ。うすい色をした、ほのかに香りする、さわやかな味のお茶だった。そのあと老婆は、彼に吸わせるために、もう一服、さらにもう一服と、パイプの下拵えをしていった。彼の妻はベッドの上に戻り、まもなく彼の足元に体を丸くしてうづくまり、そのまま眠ってしまった。

グローズリーは一度に二、三服続けて吸った。そして彼が阿片

その顔は平べったく、皮膚は土気色だった。むっとりした表情だったが、単にはにかんでいるだけだったのかもしれない。彼女は部屋から出ていき、まもなくウイスキーのボトルと、グラス二個と、炭酸水のビンをもって戻ってきた。

わたしはあたりを見まわした。うしろの方に、黒っぽい無地の板でできた衝立があり、それが隣りの部屋との仕切りになっているらしかった。そしてこの衝立の中央部には、グラビア雑誌から切り取ってきた、ジョン・ゴールズワージー（「註」イギリスの小説家・劇作家。一九三二年ノーベル賞受賞）の肖像写真が、ピンで留められていた。肖像写真は渋く、穏やかで、紳士然とした顔をしており、わたしは、どうしてゴールズワージーがこんな所にいるんだろう、といふかった。壁には白いしついくいが塗られていたが、それもうすぎたなく汚れていて、その上に『グラフィック』や『イラストレイティド・ロンドン・ニューズ』などの絵入新聞から切り抜いてきた絵が、ピンで留めてあった。

「わたしが張ったんですよ」とグローズリーは言った。「ああいうのを張ると、家庭的な感じがでるだろうと思ったんでね」

「ゴールズワージーを選んだのはどういうわけですか？ 彼の作品をお読みになるんですか？」

「いや、わたしは彼が作家だとは知りませんでした。あの顔が気に入ったんでしょうかね？」

床には破れてうすよごれた籐のマットが一、二枚敷かれており、隅には『香港タイムズ』が山と積まれていた。家具はといえば、洗面台、キッチン用の椅子が二、三脚、テーブルがひとつずつ、そして大きなチーク材のヴェトナム式のベッド、それだけである。いかにもわびしく、むさくるしい感じだった。

「わるくない部屋でしょう？」とグローズリーは言った。「わたしはとても気に入ってるんですよ。そりゃあ、以前は引越しを考えたこともありましたがね。でも今はもう、永久にしないと思い

ます」彼はクックと小さく笑った。「わたしは四十八時間滞在のつもりでハイフォンに来ました。ところが、もう五年間もここに居ついているというわけです。実を言うと、上海へ行く途中だったんですがね」

彼は口をつぐんだ。わたしも別に言うことないので、何も言わなかった。すると、彼の奥さんのヴェトナム女が、わたしにはわからない言葉で何か言い、彼はそれに答えた。それからまた一、二分間黙っていたが、どうやら彼は、わたしに何か聞いてみたいことがあるらしい様子だった。なぜ彼がためらっているのか、わたしにはわからなかった。

「あなたね、東洋を旅行している間に、阿片を試されたことがおありですか？」とうとう彼は、さりげない調子で訊ねた。

「ええ、一度だけ、シンガポールでね。どんなふうなものか、知りたいと思ったんです」

「で、いかがでしたか？」

「別にスリル満点というようなことはありませんでしたよ、実を言うとね。最高に素晴らしい気分を味わえるだろうと思っていました。わたしは幻を見ることを期待したんですよ、あの、ド・クインシー（「註」一九世紀のイギリスの随筆家。『阿片愛飲者の告白』の著者）のようにね。でもわたしが感じたことといえば、一種の肉体的快感、ちょうどトルコ風呂に入って、クーリング・ルームで横になっているときに感じるのと同じような快感と、それから特別に活発な精神の活動状態、つまり自分の考えることはすべてめちゃくちゃに明快だという実感でした」

「よくわかります」

「とにかく、二たす二は四、疑問の余地まったくなしといった感じ、まあ、快刀乱麻を断つとでも申しましょうか、そういった快調な気分を確かに味わったんです。しかしその翌日になると——ええ、畜生、ガンガンと、頭が割れんばかりに痛みました。一

「結構です」とわたしは言った。

わたしが次の日にハイフォンを去ることは、すでに彼に伝えてあった。彼は自分の住所を書くために、紙を一枚持ってきてくれとボーイに頼んだ。彼は十四才の少年のような字で、苦勞して書いた。

「ホテルのボーイに、この住所の場所を、人力車の少年によく説明するように言つて下さい。わたしはこの二階に住んでいます。呼び鈴はありませんから、直接ノックして下さい。じゃあまたそのときに」

彼は去っていき、わたしは昼食を食べ始めた。

夕食後、わたしは人力車呼び、ボーイの助けを借りて、車夫の少年に、わたしが行きたいと思つてゐる場所を呑みこませた。まもなくわたしは、冒頭で述べた、その両側に立ち並ぶ家々が、色あせたヴィクトリア朝の水彩画のように見える、あの美しいカーヴを描いて流れる運河に沿つて、わたしをのせた人力車が走つてゐることに気付いた。人力車は、その家々の、とある一軒の前で止まり、少年はドアを指さした。それはひどくみすぼらしく、付近一帯も大分ごみごみしてゐたので、少年が間違えたのではないかと思つて、わたしは一瞬入るのをためらつた。グローズリーが土着民の住む地域のこんな奥深い所に、しかもこんなに汚い家に住んでいるなんて、とても考えられなかつたからである。

わたしは車夫の少年に、そこで待つように言つておいて、ドアを押しかけた。目の前には暗い階段が見えた。あたりには誰もおらず、通りにも人影はなかつた。それこそ、草木も眠る丑三つどき、といった感じだった。わたしはマツチをすつて、手探りで二階へと昇つていった。二階に着いても一度マツチをすつた。すると目の前に大きな茶色のドアが現れた。ノックすると、すぐにローソクをもつた小柄なヴェトナム人の女が、ドアをあけてくれ

た。彼女は貧民階級の女が着る茶褐色の服を身にまとい、頭に小さな黒のターバンをきつく巻いてゐた。唇とそのまわりの皮膚はキンマ（〔註〕熱帯植物を原料として作つた嗜好品。東南アジアの人たちはこれを常習的に噛む）で赤くよごれていて、何か喋ろうとして口を開くと、この地方の人に特有の、醜く黒い歯と歯ぐきがむき出しになるのが見えた。彼女はこの地方の言葉で何か言つた。するとグローズリーの声が聞こえてきた。

「どうぞおはいんなさい。あなたもう来ないんじゃないかと思ひ始めていたところでした」

わたしは小さな入口の間を通り抜けて、明らかに運河を見おろしてゐるらしい大きな部屋に入った。グローズリーは長椅子に横になつてゐたが、わたしが入つていくと、そこから全身を起こした。彼は、そばのテーブルの上に置いてある石油ランプの光で、新聞を読んでいたのだつた。

「おすわり下さい」と彼は言つた。「そして足をこの椅子の上にあけて、くつろいで下さい」

「わたしがあなたの椅子を使うわけにはいきませんよ」

「いや、全然かまいません。わたしはこれにすわりますから」

かれはキッチン用の椅子をもち出してきて、それにすわり、自分の足をわたしの椅子の端にのせた。

「あれが女房です」彼はわたしのあとについて部屋に入ってきたヴェトナム人の女を、親指でさし示しながら言つた。「それから、あつちの隅の方にゐるのが、うちの息子です」

わたしは彼の視線を追つた。壁を背にして、竹の敷物の上に横になり、毛布で身体を覆つて、子供がひとり眠つてゐるのが見えた。「起きてゐるときは元氣のいいヤンチャ坊主でしてね。本当にあなたにお見せしたいですよ。女房には近々もうひとり生まれます」わたしは彼女の方をチラと見て、彼の言うとおりでゐることを知つた。彼女はかなり小柄で、とても小さい手足をしているが、

ようには、とても思えなかった。

「あなた、中国で何をしておられましたか？」とわたしは訊ねた。  
「乗船税関監吏をやりました」

「ああ、そうでしたか」

それはあまり上等な職業ではない。わたしはできるだけ注意して、自分の声に驚きの響きがまじらないよう、気を配った。

乗船税関監吏というのは、中国税関の吏員であって、その任務は、方々の条約港でいろいろな船に乗り込んで検閲することであり、彼らの主な仕事は、阿片の密輸入を防ぐことであつたようだ。彼らの多くは、退役した元大英帝国海軍水兵や、任期を終えた下士官である。彼らが揚子江沿岸のあちこちの港で船に乗り込むのを、わたしは見たことがある。彼らは水先案内人や航海技師とはねんごろになるが、船長たちは彼らにややそっけない態度を示す。彼らはたいいていのヨーロッパ人よりずっと流暢に中国語を話し、多くは中国人の女と結婚している。

「イギリスを去るとき、わたしはひと財産つくるまでは帰って来まいと誓ったんです。そしてその誓いは果たしました。当時は乗船税関監吏のなりて——これは白人でないといけないのです——が見つかる、連中は大いに喜んで、余計なことにはなにも聞かなかった。当人の前歴など、どうでもよかったんですね。実のところ、この仕事にありつけて、わたしはすごく嬉しかった。連中に働かれたところは、ほとんど無一文だったですからね。わたしとしては、もっといい職が見つかるまでの、ほんのつなぎのつもりでした。でも結局、ずっとやり続けました。この仕事はわたしに合っていたようです。わたしは金儲けがしなかった。そして乗船税関監吏というのは、相当な額の金を獲得することができると承知していることを知ったんです。もちろんその「正しいやり方」を承知していればの話ですがね。わたしは中国の税関で、二十年という長い期間を勤めあげました。そしてわたしが退職したときには、役

所のお偉方だって、それを手に入れたらさぞや大喜びしたろうくらいの大金を、わたしがためこんでいたということ、これは掛け値なしに断言することができますよ」

彼は狡猾な、卑しい目つきでわたしを見た。彼の言おうとしていることは、わたしにもおぼろげながら理解できた。しかし、わたしにも早く安心させてもらいたいことがあつた。もし彼が、わたしに百ピアストルくれと言うつもりなら（わたしはそれくらいの金を出すことを、今はもう覚悟していた）、その一撃を加えるのは、今すぐにしてもraithたいと思つたのだ。

「その大金を、しっかりともち続けておられるとよかったですね」とわたしは言った。

「もちろんそうしましたよ。わたしはその金をいったん全部上海で投資し、中国を去るときに、それをそっくりアメリカの鉄道債券に替えました。『安全第一』というのがわたしのモットーでね。わたしは詐欺師というものをあまりにもよく知っているんで、自分がリスクを背負う気にはとてもなれませんでした」

わたしは彼のその言葉が大いに気に入つたので、一緒に昼食でもいかがですか、と誘ってみた。

「いいえ、ご遠慮しておきましょう。わたしは昼食はあまり食べませんし、それにいづれにせよ、家でわたしの食うものが用意されていふことでしょうか。ではそろそろ、おいとまします」

彼は立ちあがってわたしを見おろしながら言った。

「あのう……今晚わたしの住んでいる所を見に来ませんか？わたしはハイフォンの女と結婚しましてね。子供もおります。わたしがロンドンのことを誰かと話し合う機会というのは、あまりないですよ。夕飯はすましていらつした方がよろしい。わたしたちはこの土地の食べものしか食べませんし、それがあなたのお口に合うとは思えませんからね。九時ごろいらつして下さい。よろしいですか？」

この非難が向けられた哀れな学生は、耳のつけ根まで真っ赤になり、あわてて新聞をポケットの中に押し込もうとした。解剖学の教授は、それを冷ややかに眺めていた。

「その新聞は、どうやら少し大きすぎて、君のポケットにはいりきらないのではないかと思うよ」と彼は言った。「多分、君はそれを手渡しでここに届けてくれるぐらいの親切心はおもちだろう？」

新聞は、階段教室の座席の列から列を伝って、低い所にある教壇にまで手渡しで届けられた。そして、哀れな学生を混乱に陥れただけでは満足せずに、その高名な外科医の教授は、新聞を手にとって、こう要求した。

「あの紳士が、あんなに熱中するほどの興味を示したのは、この新聞のどの箇所なのか、ひとつお訊ねしてもよろしいかな？」

最前列にいて教授に新聞を渡した学生が、むっつりとした顔で、わたしたちみんながそれまで読んでいた箇所を指で示した。教授はそれを読み、わたしたちは黙って彼を見つめていた。ややあって、彼は新聞を下に置き、講義を再開した。

その箇所の見出しは、「医学生逮捕」というものだった。グロズリーは、品物をつけで入手してそれを質入れたという罪で、警察裁判所判事の前に連行されたというのだ。これはどうやら起訴手続きをへて訴追される犯罪であるらしく、判事は彼に一週間の拘留を命じ、保釈は拒否されたということだった。競売で品物を買収して、それを質に入れることで金を儲けるという彼のやり方は、結局のところは、彼が初めに予想したほどの確実な収入源とはならないことがわかったので、後になると、金を払わずに品物を手に入れて、それを質に入れる方がずっと儲かると考えて実行したというのが、どうやら本当のところらしかった。

講義が終わるや否や、わたしたちはこの事件について興奮して語り合った。そして、これは言っておかなければならないが、当時のわたしたちは、自分の財産というものをもっていなかったの

で、所有権の神聖さについての意識はきわめて薄く、そのため、わたしたちの誰ひとりとして、彼の犯罪を非常に重大なものとは考えなかった。しかし、とかく恐ろしいことが好きな若者の自然の気持からして、グロズリーの受ける刑は、軽くて重労働二年、重ければ懲役七年といったところだろうと考えなかった者は、まづいなかったのである。

なぜだかよくわからないのだが、グロズリーの身にその後起こったことについての記憶が、わたしにはさっぱりないのである。どうもそれは、彼が逮捕されたのが学期末近くになってのことであり、わたしたちが休暇でみんなロンドンにいなくなったあとで、彼の取り調べが本格的に再開されたからではなかったかと思う。それが警察裁判所で簡単に処理されたのか、または正式の裁判にかけられたのかは、さだかでない。うろ覚えだが、彼は六週間くらいの短い禁固刑を科せられたように思う。彼の犯行はかなり広範囲にわたっていたからである。しかしとにかく、彼はわたしたちの視野から消えてしまい、しばらくすると、もはや誰も思い出す者はいなくなった。だから、こんなに長い年月をへたあとで、わたしがあの事件のことをこんなにいろいろと、しかもこんなにはつきりと思い出したというのは、不思議なことであった。それはちやうど、古いスナップ写真のアルバムをめくっているうちに、すっかり忘れていた光景の写真が、突然目にはいつてきたようなものであった。

しかしながら、今日の前にいる、灰色の髪の毛と斑紋状のしみのある、赤ら顔の、この太った年配の男の中に、あのひよろ長い桜色の頬をした若者の面影を認めることは、とてもできない話だった。彼は六十才にみえたが、本当はそれよりもずっと若いはずだった。あのときから今までの間、彼はどんな生活を送ってきたのだろうか、わたしは考えてみた。非常に裕福な暮らしをしてきた

グローズリーを崇拜の眼で眺めていた。「いやまったく、あいつは利口なやつだよな」とわたしたちは言った。

「本当に、これ以上ないほどに頭の切れる男だ」

「ああいうのが、末は百万長者になるんだろうな」

わたしたちはみな非常に「世故にたけていた」ので、十八才の自分たちが人生について知らないことがあるとすれば、それは知る価値のないことなんだと確信していた。ところがそのくせ、口述試験のとき、先生から質問をされると、わたしたちはすっかりドギマギしてしまって、答が頭から飛んでいってしまふとか、病院内で、看護婦に手紙を出してきてちょうだいなどと頼まれると、耳まで赤くなったりすることがたびたびあったのは、甚だ口惜しいことであった。

たまたま学生監の先生がグローズリーを呼びつけて、こっぴどく叱ったということがみんなに知れわたった。もし君がこのままずっと勉強をサボり続けるなら、何らかの罰を与えなくちゃならないって、彼をおどしたというのだ。グローズリーは怒った。おれは今までに、学校で先公からのそんなおどしなぞ、飽きるほど経験してきたんだ、と彼は言ったものだ。おまえみたいな馬づらのインポテ野郎に、ガキみたいに扱われてたまるか。なめんなよ！ おれだってもうすぐ十九になるんだ。おまえに教えてもらうことなんか、たいしてありやしないよ……。学生監は、君は体をこわすほどの大酒を飲んでるそうだな、と言った。よけいなお世話だ、と彼は言い返した。いくら飲んでも乱れないことでは、おれは同じ年齢の仲間の誰にも負けやしないんだ。先週の土曜も浴びるほど飲んだし、次の土曜も大いに飲んでやるぞ。それを気にいらぬというやつがいたって、そんなこと知るもんか……。グローズリーの友人たちは、男たるもの、あんな侮辱を受けて黙っ

ていられるかと言って、彼を全面的に支持した。

しかし、遂に一撃が下された。それがわれわれみんなに与えた衝撃を、わたしは今でもまだまざざざと思ひ出す。わたしたちはグローズリーの姿を二、三日見なかったが、彼はそのころ学校に来るのがだんだん不規則になってきていたので、そのことに気づいても、どうせあいつのことだから、例のとおりバカ騒ぎをやらかして、二日酔いのびているんだろう、ぐらいにしか考えなかったのではないかと思う。やつは一日二日したらまた出てくるだろう。少し蒼い顔色をして、だが、彼が拾った女の子のこと、そしてその子と遊んだお楽しみのひとときについての素敵な話をみやげに、やつはひょっこり現れるだろう、とわたしたちは予想していた。

解剖学の講義は朝の九時からで、それに遅れないようにするのは大忙しだった。担当の教授というのは、自分の明快な英語と歯切れのよい喋り方が大層ご自慢であることが、はた目にもよくわかる人で、その日も人間の骨格のどこやらの部分について、得意になって説明をしていた。だが、その講義をまじめに聴いている者はほとんどいなかった。というのは、学生のすわっているベンチに沿って、ひどく興奮した囁き声が伝わっていき、それと同時に、一枚の新聞が、こっそりと手から手へと渡されていったからであった。

突然、教授は講義をやめた。彼は「気取った皮肉屋」だった。彼は学生の名前を知らないふりをして、こう言った。

「わたしは、新聞を読んでいる紳士の邪魔をして、甚だすまいと思う。解剖学というのは非常に退屈な学問なのであるが、英国外科医師会の規約があるために、解剖学の試験に合格する程度の関心を、この学問に対して払うよう、わたしが諸君に要求しなければならぬことを、まことに心苦しく思っている。しかしながら、これが不可能であると考える紳士は、そのまま自由に新聞を読み続けても一向にさしつかえない、ただし教室の外で」

なことでは試験にパスできているのかと言って、彼を嘲った。しかし、多くの連中は興奮し、感動さえした。あいつは、おれたちにその勇気があったらやってみたいと思っていることを、実際にやつてのけたのだ、と彼らは考えたわけだ。グロズリーには崇拜者たちがいて、彼がその連中に取り巻かれて、恋の冒険の物語を得意げに語り、崇拜者たちは口をポカンとあけて、その話に聞き入っているという光景が、しばし見られたものだった。

思い出が、今や群れをなして次々とよみがえってきた。彼はまたたく間に持ち前のほにかみを捨て去って、いかにも世間ずれした態度をよそおうようになった。それは、すべすべした桜色の頬をしたこの若者には、およそそぐわいものであったに違いない。みんな（と彼らは自分自身のことをそう呼んでいたのだが）は、彼の破目はずした行動のあれこれを、よくうわさし合った。彼はまさにヒーローであった。

グロズリーが解剖死体陳列室の前を通りかかったときなどに、勉強熱心な学生の一組が、自分たちの手がけた解剖体をしきりに調べているのを見ると、彼は痛烈な皮肉の言葉をあびせたものだった。彼は近所の酒場にいるときはすっかりくつろいで、女給たちとなれなれしい口を利いたりした。今振り返ってみると、故郷の田舎から、そして親や先生の締めつけから解放されて、初めてロンドンに出て来た彼は、都会の自由とスリルのとりこになってしまったのだ、とわたしは想像する。彼の放蕩といっても、それはたかのしれたものだった。言うなれば若さの衝動の発散に過ぎなかったわけ、要するに彼は自制心を失っていたのだ。

しかし、わたしたちはみな貧乏だったものだから、グロズリーがどうやってあんな派手な遊びの金の工面をしていたのか、さっぱりわからなかった。彼の父親が田舎医者であることは知っていたから、彼が父親から月にいくらぐらいの仕送りを受けていたか

の見当は、正確についていたと思う。それはパヴィリオン座附近の遊歩道で彼が拾った売春婦の料金や、レストラン・クライテリオンのバーで彼が友達におごった飲物の代金を払うのに、十分な金額ではなかった。彼はきつと、借金でどうにも首がまわらなくなっているに違いない、とわたしたちはこわごわとした口調で話し合った。もちろん質屋通いはできただろうが、顕微鏡だったら三ポンド、人体骨格標本だったら三十シリング、借りられるのはせいぜいそんなところであることを、わたしたちは経験によって知っていた。ところがグロズリーは、少なくとも週に十ポンドは使っていたに違いなかったのだ。当時のわたしたちの発想は、あまり豪華とはいえなかったのだ、週十ポンド使えるということは、途方もない贅沢であるように思われた。

友達のとおりが、遂にグロズリーの遊興費捻出の秘密を暴き出した。彼は金儲けの素晴らしい方法を見つけていたのであって、それを聞いたわたしたちは、大いに面白がりもし、また感銘も受けた。わたしたちの誰ひとりとして、こんなうまいやり方を考えつかなかっただろうし、仮に考えついたとしても、それをやってみる度胸はなかっただろう。それはこうである。グロズリーは競売所へ行って、といっても、もちろん「クリスティ」のような高級な所ではなく、ストランド街やオックスフォード通りの競売所、あるいは個人の家でやるものにだが、とにかくそういうところに出かけて行って、持ち帰りができて、安い値のものを買いあさり、次にその品物を質屋に持ちこんで、競売所で支払った金額より十シリングか一ポンド高い値で、それを質入れするのだった。

このやり方で、彼は週に四、五ポンド稼いでいた。そしておれはもう医者になんかなるのをやめて、これを本業にするつもりだ、などと言っていた。わたしたちの誰ひとりとして、生まれてこのかた一ペニーの金も自分で稼いだ者はいなかったのだ、みんなは

目になると、残った連中は、次第に「影」ではなくて、生きた「人間」になり始めていった。彼らは単に「彼ら自身」であるだけでなく、一緒に出席した「講義」であり、昼食時に同じテーブルで食べた「パンとコーヒー」であり、同じ解剖室の同じ解剖台でやった「解剖実習」であり、そしてシャフツベリー劇場の立見席から一緒に見た『「ニューヨークの美女」』（「註」当時この劇場で大ヒットしたミュージカル）であったのだ。

ボーイがブランデーの瓶を運んできた。グローズリーは（それが本名だとしておくことにするが）、自分のグラスに自分でたっぷりと一杯ついで、水やソーダで割らずに、それを一息に飲みほした。

「わたしは医者になるための勉強には我慢がなかったんです」と彼は言った。「で、やめちゃったんです。親はわたしに愛想をつかし、わたしはイギリスを去って中国に行きました。親はわたしに百ポンドくれて、これでいいようにやれ、あとは知らんと言いました。正直なところ、わたしはイギリスを出ていけるのがすごく嬉しかった。親もわたしにうんざりしていただろうが、わたしだってそれに劣らず親にうんざりしていたんですからね。それ以後、親にはあまり面倒をかけていません」

そのとき、記憶の深いところから、かすかなヒントのようなものが、いわば意識のへりにまで這いのぼってきた。ちょうど満ち潮のとき、海水が忍びやかに砂浜に寄せてきて、それからいったん引き退き、より大きな水量となって、次の波と一緒にまた打ち寄せてくるような、そんな感じであった。わたしは最初に、新聞種になった、あるつまらないスキャンダルのことをかすかに思い出した。次にひとりの少年の顔が目に見え始めてきて、さらにだんだんと、いろんなことが心によみがえってきたのだった。

わたしは今やすっかりと思い出した。そのころ彼はグローズリーと呼ばれていなくて、もっと短い名前であったように思うが、

その点は確かではない。とにかくヒョロリと背の高い少年で（彼の昔の姿がはつきりと目に浮かんできた）、やせていて、ほんのすこし猫背だった。まだ十八才だった彼は、急に背が伸びたので筋肉がそれに伴わないといった感じであり、ちぢれた光沢のある茶色の髪、かなり大ぶりの目鼻だち（今はあまり大ぶりには見えない、たぶん顔が太ってむくんでいるせいだろう）、それにとりわけ、顔の色つやが少女のように桜色で、生き生きと輝いていた。多くのひとは、彼を結構ハンサムな若者と思ったことだろう。特に女性はそう思ったに違いない、とわたしは想像する。まあ、わたしたちから見れば、彼は単に気の利かない、動作ののろい田舎者でしかなかったのだが。

次にわたしは、彼が講義にあまり出てこなくなったことを思い出した。いや、わたしが思い出したのはそのことではない。教室には学生が大勢来ていて、誰が出席して誰が欠席していたかを思い出すのはむづかしかったのだ。わたしが思い出したのは解剖室でのことである。彼はわたしはが作業していた隣のテーブルで、片足を受け持たされていたのだが、その足にはほとんど触れもしなかった。その身体の他の部分を受け持っていた学生たちは、彼が作業をサボるのをぼやいていたが、そのわけはおそらく、彼にサボられると、自分たちの作業の進み具合に支障をきたすためだったのだろうと思う。

その当時、身体の一部<sup>パート</sup>の解剖をしながら、たくさんのお話<sup>噂話</sup>が広まっていたのだが、三十年という時をへだてて、そのいくつかが今思い出されてきた。誰かが、グローズリーはたいへんな道楽者だと言いつつ、やつは大酒飲みで、しかもひどい女らしときている、ということだった。学生たちの多くはまだ純真で、家庭や田舎の学校で身につけたお固い考え方を、この医学校に持ち込んでいた。なかにはお上品っぽいのもいて、その連中はこの話を聞いてショックを受けたし、勉強ばかりしていた連中は、そん

「波止場ゴロ」(「註」南太平洋諸島の波止場をうろついて金品をせびる浮浪白人)というやつで、ふところがさびしくなつて金をたかりにきたのだと判断し、最低いくらぐらいやれば難を逃れられるものかと、頭の中で金額を考えてみた。

その男はわたしの所にやってきて、割れたきかない爪をした、大きな赤い手をさし出した。

「たぶん、わたしをご記憶ではないでしょうね」と彼は言った。

「わたしはグロズリーと申します。聖トーマス病院付属医学校(「註」ロンドンのテムズ河南岸にある。モームは一八九二年から五年間ここに在学した)ではあなたとご一緒でした。新聞であなたのお名前を見たとき、すぐにそれとわかりましてね、それでちよつとお訪ねしてみようと思つたわけなんです」

わたしはその男についてはまったく記憶がなかったが、とにかくおすわり下さいと言ひ、一杯いかがですかと、彼にワインをすすめた。

この男の外見からすると、十ピアストルは要求されそうだが、したら五ピアストルもくれてやればいいだろう、とわたしは初めは考えたのだが、今はもう、いや、そんなことではすまされないだろう、こいつは百ピアストルくれと言ひだろう、そして五十ピアストルで片を付けることができたなら、よほど運がよかったと思わなくちゃならんぞ、とわたしは心の中で思った。借金の常習者というのは、自分が借りられると予想した金額の二倍を要求するのが常であつて、要求したとおりの金額がもらえると、かえつて不満を感じてしまうものである。彼は、金をくれた相手が自分をだましたような気がしてしまうのだ。

「で、あなたは今、医者になさっているんですか？」と私は訊ねた。

「いいえ、わたしはあの学校には一年いただけでした」

彼はヘルメット帽をとつて、およそ櫛をいれたことのなさそう

な、ボサボサの灰色の髪をみせた。その顔には妙な斑紋状のしみができていて、あまり健康そうではなかった。歯はだいぶ欠けていて、口の端のあたりにすぎ間が見えた。

ボーイが注文をとりにくると、彼はブランドーをくれと言つた。「瓶でもつてきてくれ」と彼は言つた。「瓶ごとだぞ、わかつたか？」

彼はわたしの方に向き直つた。「わたしはここに住んでもう五年になりますが、フランス語の方は、どういうわけかさっぱり上達しません。トンキン語はしゃべりますがね」

彼は椅子によりかかるようにすわつて、わたしを見詰めた。「あなたをよくおぼえていますよ。あなたはよくあの双子と一緒にいたでしょう。あの双子、名前は何ていったかな？ あのころと今とをくらべて、わたしはあなたより変わりようがだいぶひどいんじゃないかと思ひます。わたしは人生の大部分を中国で過ごしてきました。ひどい氣候ですからね、あそこは。からだには相当こたえますよ」

わたしは、依然として彼をまったく思ひ出せなかったが、そのとおり隠さずに言うのが上策だと考へた。

「あなたはわたしと同じ学年でしたか？」とわたしは訊ねた。

「ええ、一八九二年入学です」

「いやまったく、古き昔のことですなあ」

およそ六十人の若者たちが、毎年医学校に入学してきた。彼らは大部分がシャイで、これから始めることになった新しい生活に戸惑つていた。それまで一度もロンドンに來たことがないという者も大勢いた。そして少なくともわたしにとっては、彼らは、いわば白いスクリーンを横切つて、何ということもなしに通つて過ぎといった「影」のようなものであつた。最初の一年間で、ある程度の人数の者が、何やかやの理由で退学していった。そして二年

長い間の東洋周遊の旅も終わりに近づいて、わたしはようやくハイフォンに着いた。この町は商業都市で、退屈な町であったが、ここからは、次の目的地である香港<sup>ハコン</sup>行きの船便があることを、わたしは知っていた。だが、その船が出航するまでの何日かを待たねばならず、その間は何もすることがなかった。ハイフォンからはアロング湾を訪れることができ、そこは北ヴェトナムの名だたる観光地のひとつだが、もう名所見物には飽きていた。わたしは好んでホテルの喫茶室にすわって——というのは、そこは比較的涼しいので、「熱帯服」を着ないでいられるのがあったから——からだ——週刊誌のバックナンバーのページをめくったり、あるいは運動のために、街の広い大通りを大股で歩きまわったりして、出航までの時を退屈もせずに過ごしていた。

ハイフォンには運河が縦横に走っており、水上にはこの地方特有の船がたくさん浮かび、そこに生活する人たちのさまざまな営みの情景がときどき目に入ってきて、なかなか色彩豊かで魅力的であった。美しいカーヴを描いて流れる運河があつて、その両側には、中国風の高い家々が立ち並んでいた。家の壁にぬられた白いしつুকいは、変色してうす汚れていたが、灰色の屋根は、青い空を背景にして、目に快い絵柄をつくり出していた。その風景は、古い水彩画の色あせた優美さをただよわせており、どこにもどぎつい色調はなく、やわらかで、すこしものうくて、かすかに憂愁の思いを感じさせる、といった趣きであった。わたしは、若いころに知り合っていたひとりの老嬢のことを、なぜとも知らず思い出していた。そのひとは、ヴィクトリア朝の遺物のような女性で、黒い絹の指なし手袋をはめていて、貧しい人たちのために、クローセ編みのショールを編んでやっていた、寡婦には黒の、人

妻には白のショールを。彼女は若いころずっと苦勞をしたようだが、それが病弱のためだったのか、あるいは片思いのためだったのかは、誰もはっきりと知る者はいなかった。

ところで、ハイフォンでは地元の新新聞が発行されていた。小型の一枚の紙に、ごつい活字で印刷されたもので、それにさわるインクが指についてくるといったお粗末な新聞だったが、ともかく政治記事や海外ニュースやローカルニュースや広告などが掲載されていた。編集者は、おそらく載せる材料に窮してであろうが、ハイフォンを訪れたり去ったりしていくヨーロッパ人やヴェトナム人や中国人の名前を、紙上に掲載しており、従ってわたしの名前も、他の人たちの名前と一緒に出ていた。

わたしが乗るつもりであった香港行きのボロ船の出航予定日の前日の昼近く、わたしはホテルの喫茶室にすわって、食前酒のワインを飲んでいた。するとボーイがそばに近づいてきて、男の方がお会いしたいとおっしゃっておりますが、と言った。わたしはハイフォンに知り合いはまったくなかったもので、それはどなたかねと訊ねた。ボーイは、イギリス人で当地に住んでいらっしゃる方ですと答えたが、名前までは言ってくれなかった。なにせ相当にひどいフランス語なので、彼の言うことを理解するのは困難だったのだ。わたしは困ってしまったが、とにかくその方をこちらへお通しするようにと言った。

しばらくすると、彼はひとりの白人を連れて戻って来て、わたしを指さして、あの方ですと彼に教えた。その男はわたしの方をチラリと見て、すぐこっちに近づいてきた。彼は六フィートを優に越える非常に背の高い男で、すこしむくんだ感じの太り方をしており、赤ら顔をきれいに剃り、眼の色はごくうすいブルーだった。身なりはいえ、だいぶくたびれたカーキ色の半ズボンに、半袖の上衣を第一ボタンをはずして着ており、そしてつぶれたヘルメット帽をかぶっていた。わたしは即座に、こいつは例のあの

『蜃<sup>しん</sup>

気<sup>き</sup>

楼<sup>ろう</sup>』

(MIRAGE)

大河内 康 行 訳  
サマセツト・モーム 作